FAIRY TAIL【十代目レイヴマスター】

神爪 勇人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『フィオーレ王国』

人口１７００万の永世中立国

そこは、魔法の世界

魔法は、普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた

そしてその魔法を駆使して、生業とする者共がいる

人々は、彼等を『魔導士』と呼んだ

魔導士達は様々なギルドに属し、依頼に応じて仕事をする

そのギルド、国内に多数

そして、とある町に、とある魔導士ギルドがある
かつて・・・いや、後々に至るまで、数々の伝説を生みだしたギルド
その名は――――――【ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ】。

目次

序章　勇者の血を引く者
第１話　銀髪の少年 ―― 2
第２話　デビルマ全書 ―― 7
第３話　かつて起きた戦争 ―― 12
第４話　オカルティック城 ―― 17
第５話　シルバとエレナ ―― 22
第６話　バーバラ ―― 26
第７話　シルバのネックレス ―― 30
第８話　聖石を継ぐ者 ―― 39
第９話　卒業試験 ―― 45
第１０話　伝説の剣の行方 ―― 52

序章　勇者の血を引く者

第1話　銀髪の少年

妖精に尻尾は有るのか、無いのか。
そもそも妖精は存在するのか、しないのか。
故に、永遠の謎、永遠の冒険。
コレは、後の世に至るまで数々の伝説を生みだしたギルド――――『妖精の尻尾（フェアリーテイル）』に所属する、勇者の血を引く男の物語。

◆◆◆

Ｘ７６２年
その子の両親は、特に目立った特徴のない、極々ありふれた人間である。
だが、その子は普通の人間には無い力を持っていた。
生まれながらにして異常とも言うべき高すぎる魔力を持ち、両親はまだ生まれて間もない子の身体を治す為に、その子を魔法開発局に預けた。
だが、それが問題だった。
預けられた研究所が暴発し、職員はほぼ全滅。

その子も、爆発の影響で飛ばされ、川へと流された。
人里から遠く離れた地であるが故に、研究所が爆発した事に気付いたのはかなりの時間が経過した後であり、その子も死んだものと思われた。
しかし、その子は生きていた。
川をどんぶらこ、どんぶらこと流れて、拾われたのだ。
――――――左目に斬られたような傷跡を持ち、銜え煙草を吹かす竜（ドラゴン）に。

◆◆◆

Ｘ７６９年

「それがオレだ。つまりお前が今こうして生きてるのはオレのおかげって訳だな、感謝しろよ」
「ふーん」
「興味なさげだな、オイ」
深い森の中、横で煙草を吹かす竜の話を適当に聞き流し、俺は川に垂らした釣り糸を凝視する。
「いや、無い訳じゃないんだけどよ、今日の飯の方が大事だ」
「まぁ、そこはオレも同意見だがよ、人の話はちゃんと聞け！」
「ボムって人じゃなくてドラゴンじゃん？」

「そーいう事言ってんじゃねぇんだよ‼」
「あ、かかった！」
「聞けよ!?」
　木の棒で作った適当な釣竿から伸びる、蔓で作った適当な釣り糸に獲物が引っかかったようで、俺は力いっぱい引き上げた。
　コレはデカいぞ‼
「オッシャア！　大物ゲットォォオーッ‼」
「おー、コイツはデカいな」
「ボム！　火出してくれ、火‼」
「チッ・・・テメェもいい加減コレくらいの魔法は使えるようになれよ」
　予め準備してあった薪に、ボムは口から火を吐いて点火する。
　今日釣りあげた魚は１０匹ほど。
　まぁ、コレくらいで足りるだろ。
「そういえば、エレナはどうしたんだ?」
「・・・・・・・そこだ」
　細長い木の枝で魚を刺して火にかける俺の問いに、ボムは疲れた顔をして顎でしゃくる。

目を向けると、両髪をお下げにした少女が大きな葉っぱを布団代わりにして寝息を立てていた。
「エレナめ、俺にだけ飯の用意させやがって・・・・・・・」
「オレも手伝ってやってんだろーが」
「釣ったのは俺じゃん！」
「火点けたのはオレだ」
「「・・・・・・・・・・・・・」」
「エレナの分は無しでいいか」
「そうだな」
働かざる者食うべからずだ。
何もしない奴が飯にありつく資格など無い。
「２人共食べないの？（モグモグ）」
「「何でテメェがイの一番に食ってんだよ!?」」
ほんの一瞬目を離した隙に、何時の間にか起きたらしいエレナが魚を食っていた。
魚が焼ける匂いで目を覚ましたのか!?
「つか、それ一番デカいやつ！　普通それは俺が食うべきだろ!?」
「いや、ドラゴンのオレが食うべきだろ」

「お前身体小さいじゃん！」
ボムはドラゴンだ。
だが、その体格はせいぜい人間の頭部よりは一回り大きい程度の大きさで、ずんぐりむっくりとした体形であるが故、何処となくぬいぐるみっぽい。
煙草吹かしてるうえに目付きも悪いが。
「シルバもボムも食べるの遅いからよ（ムシャムシャ）」
「だから何でオマエが最初に食ってんだよ我儘女！」
「しかも2匹目だしよ‼」
このエレナも、俺より年上の癖してなんて大人げないんだ！
「ったく、コレ食ったら魔法の修行の続きだからな」
「わーってるよ！（ガツガツ）」
「分かってる分かってる（モグモグ）」
「・・・・・ホントに分かってんのか、コイツ等」
俺の名はシルバ。
1匹のドラゴンと、1人の姉弟子と共に魔法修行している、銀髪が特徴の見習い（現在6歳の）魔導士だ。
・

第２話　デビルマ全書

「炎竜旱天‼」

ゴウっと、俺の口から放たれる竜の咆哮。

放たれた炎の奔流が、目の前の標的を焼き尽くす。

「よっし！　いい感じ‼」

「だいぶ上手くなってきたな」

ただ炎を吐くだけじゃない。

その力加減もばっちりだ‼

「良い焼き加減だぜ‼」

「やっぱ魚は焼くに限るな」

俺のブレスで焼いた魚を食すボム。

人里離れた森の中での修行も、もう7年近くになるのか。

赤ん坊の頃、川に流れていたところをこのボムに拾われて、ボムの飼い主（？）のマグ婆ちゃんと孫のエレナと共に育ち、魔法を学ぶ日々。

ボムから教えて貰った【滅竜魔法】を始めとする色々な魔法と、エレナとの組手で身

に付けた体術、マグ婆さんからも様々な知識を教えてくれた。
何故こんなに魔法を学んでいるか・・・・・それは、一流の魔導士になる為だ。
何故俺が一流の魔導士になりたいかというと・・・・・特に理由はない。
いや、魔導士の婆さんに、魔法を使えるドラゴンに、魔導士を目指している娘がいる所で育ったせいか、なんか取りあえず魔導士目指しとけよというノリなだけで、深い意味は無いのだが。
「今更、本当の両親を探そうとも思わねぇしなぁ・・・・・・」
川を流れてきた俺を拾ったボムが当時、川の上流の様子を見て来て炎上してる研究施設を見つけて色々調べてくれたが、俺が何処の誰かまでは分からなかった。
分かったのは、その研究所は俺の様な魔力的・魔法的問題のある子供を預かっていた事と、何かしらの研究をしてたって事くらいか。
人里からかなり遠く離れている事を考えて、危険な研究をしていたのだと思うが、真実は分からない。
・・・・・・そこまで興味もないしな。

◆◆◆

「デビルマ全書が盗まれたらしいのよ!」
「・・・・・・あ、そうなんだ?」

いつものように魔法の練習や勉強の日々を送る俺に、唐突にエレナがそう言った。
「つか、『デビルマ全書』って何？」
「アンタそんなことも知らないの？」
小馬鹿にした感じがスゲェムカつくが、俺はエレナの解説を聞く事にする。
『デビルマ全書』
それは、恐ろしい悪魔を召喚する魔法の書物。
なんでも『ゼレフ書の悪魔』の一体なんだとか。
『ゼレフ書の悪魔』・・・・・確か４００年前に存在していた大魔導士で、彼が作り上げた魔法道具の一つなのだとか。
・・・・・あれ、かなりヤバくね？
悪魔ってのがどれくらい恐ろしいのかは知らないが、４００年経過した今でも名を遺すほどの大魔導士が作った悪魔だ。
相当危険なのだろう。
「で、その危険な『デビルマ全書』が盗まれたって？」
「そうよ」
「誰が盗まれたんだ？」
「マグ婆ちゃんよ」

「婆ちゃんかよ・・・・・・」

俺とエレナの育ての親にして、ボムの飼い主（？）。

マグ・アルテーリア。

聖杖マリアブレイクという杖を使う、聖なる魔法の使い手だ。

ボムと共に俺達に魔法を教えてくれる師匠でもあるのだが、ワリと乱暴なボムが可愛く見える程のスパルタババアだ。

無茶な修行を俺達に課しては「文句あっかい？」と睨みを効かせるババアだ。

川に流れてた赤ん坊だった俺を拾って育ててくれた恩義はあるのだが、それでも偶にそのまま放置してくれればよかったのにと思わない事もない。

そんな婆さんだ。

ま、かなりの魔法の使い手なのは間違いないだろう。

なんせずんぐりむっくりとはいえ、ドラゴンのボムに言う事利かせてんだから。

「だから、そのデビルマ全書を取り返そうと思うのよ！」

「誰が？」

「私とシルバが」

「俺もかよ」

「もしもデビルマ全書を取り返せば、きっとマグ婆さんも私達を見直すはずよ!!」

「どーせ後で怒られるだけだと思うがな」
「いや！　やってやるわ‼　やあぁぁぁーってやるわッ‼‼」
　気合入りまくりだなぁ、おい。
「取り返すっつってたけどよ、ギッた奴の目処は付いてんのか？」
「あ、誰が盗んだのかは知ってるわよ」
「あん？」
「という訳で行くわよッ‼」
　ガシッと俺の首根っこを掴んで引き摺り駆け出すエレナ。
「ちょっと待て！　せめてボムと一緒に行った方が良くないか!?」
「ボムはダメよ、今マグ婆さんに絞められてるから」
「・・・・・・またなんかやらかしたのか」
　この間はマグ婆さんの秘蔵のワインを勝手に飲んでシバキ回されてたな。
「だから、マグ婆さんがデビルマ全書を盗まれたことにすら気づいてない今の内に取り返して、私達が一人前のプロ魔導士だって認めさせてやるのよ‼」
「それが狙いかい」
　こうして、俺とエレナの『デビルマ全書』奪還が始まった。
・

第3話　かつて起きた戦争

「文句あっかい？」
「文句しかねぇよッ‼」
　ロープでグルグル巻きにされて天井から逆さに吊るされているボムは、チビッこい婆さんに激高する。
　この小さい婆さんこそ、シルバとエレナの育ての親にして、ボムの飼い主（？）の魔導士。
　マグ・アルテーリア。
　国内でも強い力を持つ魔導士である。
「アタシがいない間に随分好き勝手やってくれたねぇ、このチビデブドラゴンがぁ・・・・・・」
「チビでもデブでもねぇよ‼　良いじゃねぇかよ、ちょこっと酒飲んだくらい」
「アタシのワインコレクションをこんだけ飲み散らかしといてどの辺がちょっとさね⁉」
　マグ婆さんの足下に散らかる空の酒瓶。

これ等は全部ボムが呑んでしまったものだ。
「ケチクセェババアだな」
「反省の色が足りないようだねぇ・・・・・・」
杖をチラつかせるマグ婆さんに、ボムは舌打ちして目を逸らす。
この見た目に反して、凄腕の聖なる魔法の使い手である婆さんを無闇に怒らせると面倒なことになる。
『聖十』――――――大陸最強の魔導士の称号を持つ１０人の一角を担う魔導士の１人だからだ。
「んで、出かけた成果はあったのかよ?」
ロープで宙ぶらりんの体勢のまま煙草を吹かすボムの問いに、マグ婆さんは小さく嘆息する。
ここ数ヶ月、マグ婆さんは家を留守にして、ある場所へ赴き調べ物をしていたのだ。
「シルバの素性を調べてたんだろ?」
「収穫はあったよ・・・・・・・」
マグ婆さんも煙草を取り出し、火の魔法で着火し、紫煙を吸い込み、吐き出す。
「アタシの想像通りなら、とんでもないよ、あの子の血筋は」
「・・・・・・・アンタがそこまで言うほどなのか?」

「・・・・・・ボム。アンタ『石の戦争』は知ってるね？」

質問を質問で返すマグ婆さんに眉を寄せるが、ボムは「ああ」と頷いた。

「まぁ、歴史の教科書に載る程度には有名だからな。あまりにも規模がデケェ戦争の上、魔界だの悪魔だのが出てくるから、学者の中には作り話じゃないかって疑っている奴もいるみてぇだが・・・・・・」

「いや、事実だよ」

紫煙を吐き出すマグ婆さんは、吐き出した煙に自身のイメージで形作った映像を投影させる。

それは、戦争の光景だ。

「今から約８００年前、世界規模で戦争が起きた。魔石（ダークブリング）と呼ばれる魔法の様な力が使える邪石が世界中に蔓延り、世界各地で紛争が勃発していた。その魔石（ダークブリング）に対抗する為、ある者が創り出した光の石・・・・・・聖石（レイヴ）。光の聖石（レイヴ）と闇の魔石（ダークブリング）の戦争が長きに渡り続き、約５０年後に決着を迎えたとされる戦争」

『２つの石の戦争』

『聖石と魔石の戦争』

あるいは『光と闇の大決戦』と呼ぶ者もいる。

「その聖石を操る者を聖石使い（レイヴマスター）と呼び、聖石が誕生して最初の戦争に使用した初代、そし

て５０年後に現れた後継者(2代目)。２代に渡るレイヴマスターとその仲間達の尽力により、戦争は終結した」

「・・・・・・それくらいは知ってる。此処イシュガルではそこまで有名な戦争じゃねぇが、４００年前の時点でも広く知られていた」

昔を思い返す様に虚空を見やるボム。

そんなボムに、マグ婆さんは頷く。

「魔石(ダークブリング)は『石の戦争』が終結し全て滅んだが、聖石(レイヴ)はどうなったか知っておるか?」

「・・・・・・そういや、知らねぇな」

「戦争終盤に2代目が消滅し、1年後に奇跡的な復活を遂げるという逸話がある。消滅した時に聖石も消えたとされているが・・・・・・」

「違うのか?」

「ああ」

言って、マグ婆さんは一冊の本を開き、開いたページをボムに見せた。

「!?　それは‼」

「そうじゃ。アンタも見覚えがあるだろう」

まるで剣のような形をした、十字のアクセサリー。

そんな絵が描かれていた。

「コレは確か、アイツが持ってたもんだろ!?」
「ああ、あの子が持っていた唯一と言っていい品じゃ。親が持たせた御守りか何かだとも思ったが、見覚えがあったのでな」
その十字のアクセサリーが何かをようやく思い出し、確信を得るために調べ回ったのだ。
そして、その確信は得れた。
「シルバが今も首にぶら下げておるアクセサリー・・・・・・アレが聖石(レイヴ)じゃ」
・

第４話　オカルティック城

「どこだいっ、どーこだいッ!!」

森の深く奥にある岩山に聳え立つ一つの小さな城。

名を『オカルティック城』。

その城に住む一人の老婆――――――バーバラは、本のページを捲りながら騒いでいた。

「せっかくデビルマ全書を手に入れたってーのに、あの悪魔の項目は何処にあるっていうんだいっ!!　全く!!」

「バーバラ様、落ち着いて初めの項目から読めばいいでしょう」

「黙っとれぇい!!　泥人形めっ!!」

自身が泥で作ったゴーレム（名前は『ゴーハチ』）からの助言を、バーバラは鼻で笑った。

「これはそういう類いの書物ではないっ!!　魔法の力により１ページ辺りに１００万冊分の情報が詰まっておるんじゃ!!　魔法のパスワードを解いていかないと、お目当ての悪魔を呼び出す項目には辿り着けないんだよっ!!」

「バーバラ様」
「なーんだいっ‼　忙しいって意味が解らないのかいっ!?」
「オカルティック城に侵入者です」
「何だってぇっ!?」
　ゴーパチの言葉に、バーバラは場内に設置しておる監視用魔水晶（ラクリマ）の水晶を見る。
　その水晶には、この城内をうろつく2人の人間の姿が。
「あれはマグババアの所のガキどもじゃないのさっ‼　奴等・・・もうここを見つけたんだねっ‼　しかもあのババア・・・・・ガキを寄越すとは、アタシも舐められたもんだね」
　本当は子供たちの独断でここに来たのだが、そんな事を知る由もないバーバラは勝手に勘違いをした。
「ん・・・待てよ・・・・・・アイツ等、デビルマ全書の所有者・・・マグババアのガキだねっ。って事は、悪魔を呼び出す方法を知ってるね」
　勿論、シルバもエレナもそんな方法知らないのだが、バーバラは勝手に勘違いした。
「ゴーハチッ‼　痛めつけても構わんから、奴らを生かして連れてきな」
「へい」
　敬礼したゴーレムのゴーハチは、侵入者を捕らえるべく部屋を後にした。

「キヒヒ・・・・・・子供に何が出来るって云うんだい。アタシの恐ろしさ、見せてくれるよっ」

◆◆◆

「いつも身に付けてるよね、ソレ」

「あん？」

階段を登りながら、エレナは俺の首にぶら下げているネックレスを見て言った。

剣を小さくしたような、十字型のアクセサリー。

俺がボムに拾われた時には既に持っていたらしく、おそらく親からの贈物だと思われる物だ。

「ソレちょうだい」

「あげるかッ‼　一応親から貰った唯一の品だぞこれっ!?」

「冗談よ」

「冗談に聞こえねぇんだよ、お前は・・・・・・」

別に親に会いたいとかそういうのは特にないが、思う所がない訳では無い。

プロ魔導士になったら気長に探してみるのもいいかもしれんな。

見つけたからって別に何する訳でもないが。

「やっぱり大事なの？　そのネックレス」

「あー・・・ま、それなりにはな。自分が何処の誰かを知る唯一の手掛かりでもある訳だし」
「気になるの？」
「それなりには。そこまで気にしてもいねぇんだが・・・・・・・」
「じゃあ、やっぱりちょうだいよ」
「だからやらねぇっつってんだろ‼」
「ケチ」
「冗談じゃ無かったのかよ⁉」
相も変わらず我儘なエレナに嘆息した直後、ズシンと大きな音を発てて、大きな影が落ちてきた。
「何だ？」
大きな岩の様な塊が転がって来たのか。
大岩に手足の様なモノが生えて、二足歩行の人型の様な形を取る。
「ゴーレムってやつじゃない？」
「あー、コレが噂の」
話には聞いたことがある。
「侵入者発見、確保する！」

そんなことを叫びながら、ゴーレムは殴り掛かって来た。
俺とエレナは左右に分かれて飛び、その一撃を回避する。
階段なんて足場の悪いところで仕掛けてきやがるとは面倒な。
「そういや、ボムやマグ婆、エレナ以外と戦うのって初めてか？」
「あ、私もそうかも」
思いがけずいきなり実戦が始まってしまったが、俺達に焦りはない。
「ま、ドラゴンとババアに鍛えられてっからなッ‼」
俺とエレナは、ゴーレム目掛けて駆け出した。
・

第5話　シルバとエレナ

俺達の5倍ほどある大きさの岩の巨人・・・・・・ゴーレムは腕を振りかぶり、突っ込む俺達を薙ぎ払おうとする。

だが、

「遅すぎだっての!!」

そんな鈍重な動きで、飛び回るドラゴン(ボム)相手に修行してた俺達に当たる訳がない。

容易く左右に別れて避けた俺とエレナは攻撃に出る。

「らあっ!!」

「えいっ!!」

俺の拳が、エレナの蹴りがゴーレムの顔面に直撃するが、

「痛えっ!?」

「硬ぁッ!?」

思いの外硬い身体に、俺の拳が悲鳴を上げた。

エレナも足を押さえて呻いている。

魔法も無しに素手でぶん殴るのは無理があったか。

「むーん」
ゴーレムは再び拳を振るって来るが、動きはやはり鈍重。
避けるのは簡単。
だが、身体が硬くてこっちの攻撃は通らない。
なら、やっぱ魔法を使わないと攻撃は通じないか。
「魂上昇（アッパーズ）!!」
エレナは自身が唯一使える魔法、身体強化系魔法を使用し駆け出す。
先程よりも遥かにスピードが増し、その加速力でゴーレムを翻弄する。
そしてすれ違い様に打撃を加えていく。
「む、むんっ？」
一撃で倒せるほどの破壊力はないが、ゴーレムが仰け反り始めた。
そしてエレナの足払いで、後ろに倒れかける。
「今よ、シルバ!!」
「ＯＫ!!」
俺は高く跳躍し、ゴーレムの上を取る。
「地竜黄塵（ちりゅうこうじん）!!」
滅竜魔法。

俺が主に使う魔法。
様々な魔法を使う魔竜ボムが、俺に教えた魔法。
かつて存在した魔界の種族・・・竜人族（ドラゴンレイス）が使っていた武術を魔法で再現したもの。
そして【地竜黄塵（ちりゅうこうじん）】は、その両足で相手を踏み砕く技。
その一撃は地面を陥没させ、大きなクレーターを造り出すほど。
ゴーレムは俺に踏み潰されて、粉々に砕け散った。
「うしっ、いっちょ上がり!!」
「よゆーよゆー!!」
エレナと勝利のハイタッチ。
初の実戦だったが、まぁ、こんなものだ。
俺とエレナの実戦は、初勝利を飾ったのだ。
◆◆◆
「なーんて様だいっ!!」
ダンッ!!と、両のテーブルを拳で叩くバーバラ。
デビルマ全書の解読を進めながら監視水晶を見ていたのだが、結果はバーバラの望んだモノにはならなかった。
「なんてガキ共だい！　流石はマグババアんとこのガキ共ってところかい!?」

舌打ちと共に、バーバラは指を鳴らす。

そしてゾロゾロと大きなゴーレムが部屋の奥から姿を現す。

「ゴーハチがやられちまったよ！　ゴーイチ、ゴーニ、ゴーサン、ゴーシ、ゴーゴ、ゴーロク、ゴーシチ、アンタ等総がかりで捕らえてきな‼」

「「あいよ‼」」

名を呼ばれたゴーレム達が、揃って駆け出した。

・

第6話　バーバラ

「――――――にしてもよ」
　オカルティック城を駆けながら、ふと思う。
「こんな森の奥にこんな城があることにも驚きだけどよ、馬鹿みてぇに広いとこだよなぁ」
「ソリャお城なんだから広くて当然でしょ、馬鹿なの？」
「オメェにだけは言われたくねぇわ」
　何か向かってきた先程と同じゴーレムを7体ボコボコにして城を駆けずり回るが、未だに『デビルマ全書』とやらを盗んだこの城の主の元に辿り着けない。
「つか襲ってきたゴーレム以外全然気配ねーな、こっちで道合ってんのか？」
「え、知らないけど？」
「は？」
　思わず急ブレーキで立ち止まり、エレナも足を止めた。
「ちょっと待て、盗んだ奴の居場所知ってるから走ってんじゃねぇのかよ!?」
「だからこの城よ」

「この城の何処に居んだよ？」
「知るわけないでしょ、始めて来たんだから」
「じゃあ何で俺の前走ってたんだよ!?」
「はぁ？　シルバが私の前走ってたんでしょ!?」
「いや、お前の方が前だった！　俺より５cmは前だった!!」
「いや、アンタの方が前だった！　私よりつま先が１ｃｍ前だった!!」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

イライラするが少し落ち着こう。
此処で言い争っていても仕方がない。
そうだ、よく考えてみたらこの身勝手で我儘でお調子者な脳タリンが道案内とかどだい無理な話なのは冷静になってみれば分かり切っていることだろう。
フッ、そうだ俺、クールになれって、コイツ相手に熱くなったって何の意味も価値もない。
冷静になった所でエレナに向き合って、

「はーっ、アンタってホント使えないわねぇ」
「よーし、やっぱぶち殺す‼」
　いい加減コイツに姉弟子面されんのも鬱陶しいしな‼
「今こそ下克上の時！　まぁ、実力は元々俺の方が上だがなッ‼」
「生意気な弟弟子をボコって現実を見させるのも姉弟子の仕事よねッ‼」
　互いに魔力を全身に巡らせ高める。
「【魂上昇(アッパーズ)】‼」
「【滅竜奥義――――】」
　互いに拳に魔力を集束させて――――必殺の一撃を放つ！
「うぉぉおおおおおりゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ‼‼‼‼‼」
「――――天竜虎博】‼‼‼‼‼」
　互いの拳が同時に繰り出され、その頬に突き刺さらんと交差する。
　これは・・・・・・クロスカウンター！
　腕(リーチ)の長さにそこまでの差はない。
　いったいどちらの頬に深く突き刺さるのか。
　固唾を呑みつつ拳を勢いのまま打ち放ち――――動きがピタリと止まった。
「あ⁉」

「え、何っ!?」
俺だけじゃない、エレナの動きも止まっていた。
何だ？　何が起きている？
俺のもエレナも気合を入れて身体を動かそうとするがピクリともしやがらねぇ。
これは・・・・・・魔法なのか？
「キヒヒ・・・随分好き勝手に暴れてくれたねぇ、ガキ共・・・・・・」
カツンと靴音を発てて近づいてくる人物が一人。
それは、髪が無数の蛇の様な形をした、異様な老婆だった。
「お前は・・・・・・!」
「おや、アタシを知ってんのかい？　まぁ、ここまで来たんなら不思議じゃないが」
状況的に、この城の主だろう。
エレナが道すがら言っていた。
このオカルティック城の主、その名は――――
「確か――――ば、ば、ば・・・・・・バーバア」
「バーバラだよクソガキがぁっ!!!!!」
そうそう、そんな名前だった。
・

第7話　シルバのネックレス

ババア・・・・・・間違えた（間違えてないかもしれないが）。
このオカルティック城の主、バーバラが登場し、俺とエレナは身動きを封じられる。
お互いクロスカウンターの姿勢で止まったままだ。
気合を入れるが、身体はピクリとも動かない。
「くっ・・・・・・・」
「動けない・・・・・・・ッ」
俺達の動きを封じたことで上の立場をとれたと見たらしきバーバラが怪しく笑った。
「キヒヒ・・・・・・・いい子にしてれば殺しやしないよ」
「チィッ・・・・・・・つか、この魔法解けよ！」
「そうはいかないよ。おっと私の眼は見ない方がいいよ・・・私の眼はねぇ、睨んだだけで相手を石化させることが出来るのさ」
「まぁ、目を合わせなければ金縛り程度で済むけどねぇ」と勝手に補足説明をするバーバラに、俺達は言ってやる。
「お前の魔法の解説とかどうでもいいんだよ！　さっさと解けやクソババア‼」

「そうよ！　早く解きなさいよ妖怪ババア‼」
「年長者に対する口の利き方を知らないガキ共だね‼　石にしちまうよ‼」
「クソババア‼　ウンコババア‼」
「バーカ、アッホ、マーヌーケ、お前の婆ちゃんデーベーソ‼」
「待てエレナ、婆ちゃんじゃなくて母ちゃんだ。婆ちゃんはコイツだぞ」
「え、じゃあ・・・・・・この婆ちゃんはデベソ？」
「誰がデベソだいクソジャリ共がああああああああああああっ‼‼‼‼‼」
ババアは憤慨しながら「なんて礼儀のなってないガキ共だよ！」と唾を吐く。
汚いな。
「用が済んだら解いてやる‼　私の質問に答えなっ‼」
「誰がテメェなんかにスリーサイズを答えるか‼」
「んなもん聴いてねぇし微塵も興味あるわけないさね!?」
「いいや嘘だね！　俺知ってるぜ‼　ババアは誘拐した子供を捕えて食う気なんだ！性的な意味で‼」
「未成年に手なんて出すわけ無いだろうマセガキがあああああっ‼‼」
「え、マジか、このババア・・・・・・青年なら手を出すってのか!?」
「うわ、マジ？　歳考えなよ・・・・・・」

「こ、の、ガキ共・・・・・・・ッ‼」
怒りによって震えながらも、埒が明かないと判断したのか、ババアは本題に入る。
「デビルマ全書の中に『ユースゥー』っていう悪魔がいるだろうっ‼　そいつの項目と召喚方法を教えなっ‼」
「・・・・・・は？」
一瞬言ってる意味が分からず硬直するが、どうやらあの書物に封じられている悪魔を召喚しようとしているらしい。
だがしかし、あの書物に何の悪魔が居るのか、それと召喚方法なんて俺は知りもしない。
なんせ本の存在すら知らなかったしな。
「おいエレナ、お前分かるか？」
「分かるわけないじゃん、馬鹿なの？」
「こんな状況じゃなけりゃぶん殴ってるとこだぞオイ・・・・・・」
「何をコソコソ話してんだい‼　さっさと答えな‼」
ババアに視線を戻して正直に答える。
「知らん」
言った瞬間、俺とエレナの手足が石化していく。

「ちょっと待て！　目見なきゃ石化しないんじゃねぇのかよ!?」
「んなもん魔力を更に強く込めればいいだけさね」
　手足から徐々に石化範囲が広がっていき、侵食してくる。
「ちょっとシルバ！　何とかしてよ!?」
「出来るか！　お前こそ何とか出来ねぇのかよ!?」
「出来ないから言ってんのよ馬鹿っ‼」
「お前(バカ)に言われる筋合いねぇよ‼」
「ゴチャゴチャ言ってないで答えるんだよっ‼　ユースゥーの項目は!?」
「待て！　本当に知らねぇんだって‼」
「てか、そのユースゥーって悪魔呼び出して何する気よ!?」
　エレナの問いに、ババアは「決まってるだろ?」と笑った。
「若返らせて貰うんだよっ‼　ピッチピチにねっ‼　ユースゥーは時を操る悪魔！　若返りの力を使えるんだよっ‼」
「・・・・・・はぁ、まぁ、歳だもんな?」
　子供の俺達には分からないが、歳をとると若返りたいという悩みを持つようになるのだろう。
「さあ！　もう最後だよ‼　ユースゥーの項目を教えな‼」

「・・・・・・って、言われてもな」
このババアが若返ろうが悪魔を呼ぼうが知ったこっちゃねぇが、知らないのは本当だ。
「マジに知らねぇんだが・・・・・・」
さてどうしようかと悩んだところで、エレナが深々と溜息を吐いた。
そして大きく息を吸い込んで、
「バッカらし～！　そんな事のために盗みなんてしたの？　まぁ、アンタみたいなババアに知ってても教えないけど」
「おい」
ただでさえ金縛りが解けねぇのに、更に石化し始めている今のこの状況で挑発は・・・・・・・。
「・・・・・・・どうやら、余程死にたいようだねぇ‼」
言って、ババアの眼光が煌めく。
俺達の身体を侵食する石化のスピードが上がっていき、
「って、おい！　ちょっと待て！　マジで待って!?」
「ヤバイ石になる!?　シルバ、任せた‼」
「挑発したのお前だろうがっ!?」

コイツ、自分で煽っておきながら俺に助けを求めんなよ‼
手足から腕や太腿、更には胴体まで石化していき、とうとう首にまで伸びてきた。
これはマジでヤバイ・・・・・・。
首にぶら下げているネックレスまで石と化し、もうここまでかと諦め始めた時――
――ネックレスが淡く輝き出す。
（何だ・・・・・・・？）
俺が拾われたときには既に持っていた、十字の剣の様な形をしたネックレス。
それが白い光を発している。
その光は徐々に強く発光し、俺の身体を蝕む石化を払っていく。
まるでベリベリと塗装の様に石が剥がれていき、俺の身体は元の状態に戻った。
「何が・・・・・・・」
起きた？
少なくとも、俺は魔法を使っていない。
未だに石化が解けないエレナは身体強化の【魂上昇（アッパーズ）】しか使えない。
このババアが解く理由がない。
なら、やはり・・・・・このネックレスが？
「マジックアイテムだったのか、コレ？」

具体的にどんな効果があるのかは知らないが、このネックレスが石化を解いたのは確かだろう。
首から外し、石化するエレナに翳す。
・・・・・・だが、元には戻らない。
何だ？　翳すだけじゃダメなのか。
「ど、どーいうことだい!?　何でアタシの魔法が!?」
俺の石化が解けて狼狽するババア。
そうだ、こういう時は大抵術者を倒せば解除されるってボムやマグ婆さんが言ってた。
なら、やることは一つ。
俺はネックレスを握りしめ、駆け出す。
「チィッ、こうなったらもう一度石にしてやる‼」
ババアの眼光が煌めく。
それに対して、俺は手に握るネックレスを前へ翳す。
すると、ネックレスが先程のように輝き、石化の力を霧散させた。
「何だい！　そのネックレスは!?　何で石にならないんだい!?」
「知らねぇ！　けど関係ねぇっ‼」

何でこのネックレスにそんな力があるのかは知らねぇ。
だが、今は都合がいい。
今は、ただそれだけでいい。
「とりあえず打っ飛べやあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!!」
ネックレスを強く握る手を拳に固め、必殺の右ストレートを打ち放つ。
拳がババアの頬を捕え――――――――爆発した。
「がああああああああああっ!?」
「うおっ、爆発した!?」
ちょっと予想外の結果に驚き、悲鳴を上げて吹っ飛び地を転がるババアを余所に、思わずネックレスを握る拳に目をやる。
これも、このネックレスの力なのか・・・・・・・？
「う、おおぉぉぉ・・・・・・・」
「あ、生きてた」
呻き声を上げながら、ババアはヨロヨロと体を起こそうとする。
「お、女を殴るなんて・・・オマケに爆破させるなんて、なんてクソガキだい・・・・・・」
「どーせ、礼儀のなってないクソガキだ」
「憎ったらしいガキめ・・・・・・おっふ・・・・・・・」

・ ババアは白目を剥いて、意識を手放し地に伏した。

第８話　聖石を継ぐ者

「ハァー、やっと動けるわ・・・・・・・」
やれやれと言わんばかりに肩を回すエレナ。
ババアがぶっ倒れて気絶したため、石化の魔法が解けたようだ。
「・・・・・・・いっそそのまま石になってりゃよかったのに」
「なんか言った？」
「いやなんでも」
口笛を吹く俺、誤魔化しは完璧だ。
エレナが睨んでるのはきっと気のせいに違いない。
そんなことよりも、だ。
俺は手に握るネックレスを改めて凝視する。
「コレ、マジで何なんだ？」
俺がボムに拾われた時には既に持っていたらしい十字剣の様な形状をしたネックレス。
石化を無効化したってことは状態異常に対する抵抗（レジスト）の力でも宿したマジックアイテ

ムなのかと思いきや、これ握ってぶん殴ったら何か爆発した。
状態異常無効化はまだ分からなくもないが、ネックレス型マジックアイテムで握って爆発はねーだろ。
実はこれネックレスではないのか？
・・・・・・帰ったらボムとマグ婆に聞いてみっか。
「あー、あったあった！　コレよコレ‼」
エレナの声に視線を向ける。
・・・・・・エレナが気絶して倒れているババアの衣服を漁っていた。
追剥か何かかコイツは。
そんなエレナはババアの服の中から一冊の本を取り出していた。
アレが件の『デビルマ全書』ってやつか。
・・・・・・あのノースリーブのワンピースの様な服の何処にあんな分厚い本を隠し持っていたのかはあまり考えない方が良いかもしれない。
「よっしゃぁっ！　これであたしも一流の魔導士よ‼」
「いや、別にこれ取り返したらプロ魔導士に成れるわけじゃねーからな？」
エレナが一人で騒ぎ立てているだけで、ヤバそうとはいえこんな本一冊取り返しただけでプロ認定というか、婆さんから免許皆伝的なモンを貰えるとは思えん。

ま、態々取り返してきてやったんだから、ちょっとくらい認めてはくれるのかもしれねーけどな。

◆◆◆

「そう思っていた時期が俺にもありました」

頭に瘤を作りながら、今日の晩飯を調達する為に、俺とエレナは川で釣りに興じていた。

あれからゼレフ書の一冊である『デビルマ全書』を持って帰ったら、マグ婆に「何修行サボって遊んでんだい!?」と聖杖マリアブレイクで頭をブレイクをされた。

エレナが「遊んでないし！　デビルマ全書を取り返してきてあげたのに!!」と口答えすると更にブレイク。

俺が「無理やり巻き込まれただけなんで、エレナは好きにしていいから俺だけは許してください」と珍しくも低姿勢な御願いをしたら「連帯責任だよアホンダラ!!」と更に頭がブレイク。

理不尽さに悪態吐くと「文句あっかい?」と更にブレイクしようと杖をちらつかせる。

何て性格の悪さ、あれで聖なる魔法の使い手とか嘘だろう。

きっとマグ婆自身がゼレフ書の悪魔に違いない、デビルマ全書から実態化した悪魔だろあのクソババア。

「はぁ・・・せっかくデビルマ全書取り返してあげたのに!・」

「必要なかったみてぇだな」

聞けば、あのデビルマ全書は1ページ辺りに100万冊分の情報が詰まっている上に読むのに記号化など様々な封印措置をマグ婆が取ってたから、早々解かれる事は無いのだとか。

だから鍵も掛けていない倉庫の奥で放置して埃を被っていたのだとか。

寧ろそんなもんをよくあのバーバア・・・じゃなかった、バーバラとやらが見つけたもんだ。

何でもマグ婆がギルドに所属していた若い頃から因縁のある相手なのだとか。

それからライバル視されて今に至ってんだから、ある意味マグ婆の都合に巻き込まれたようなもんだ。

「つか、そもそもエレナが『デビルマ全書』を取り返すとか言い出したのが原因だよな」

「何よ、あたしのせいだっての!?」

「他に何かあんのかよ!!」

「悪いのはシルバでしょ!!」

「何で俺だよ!?」
「理由なんてないわよ‼」
「理不尽すぎだろ我儘娘がッ‼」

◆◆◆

「元気な奴等だな、あんだけ説教されといて・・・・・・」
釣り糸を垂らしながらギャーギャー喚き合ってるシルバとエレナを、ボムは葉巻を吹かしながら崖上から呆れつつ見下ろしていた。
「シルバのネックレス・・・・・・聖石(レイヴ)か。爆発したらしいな」
そんなボムの横には、同じく2人を見下ろすマグ・アルテーリアの姿もあった。
マグ婆とボムが見るは騒ぐシルバとエレナ――――ではなく、シルバの首にぶら下がっているネックレスである。
「色々と不思議な力を持つ聖石か・・・まぁ、魔石(ダークブリング)なんてもんの対策として造られたものって考えりゃ、それ位の力はありそーだな」
何でも初代と二代目は聖石(レイヴ)を埋め込んだ剣で戦い、その剣は十の姿を持つのだとか。
それだけでもとんでもない能力の魔法剣だ。

代々聖石と共に剣も継承されていたようだが、それもいつの間にか伝承が失われ、いつしか聖石使いの名は古文書に残すものとなり、現代からはその名は失われた。

そんな聖石の力が発現し、その聖石を使う子供が今、ここにいる。

「偶然か、運命か。何にせよ、世界に何かが起ころうとしているのやもしれぬな……」

殴りかかってきたエレナに対して拳を突き出しクロスカウンターでダブルノックアウトするシルバ。

仰向けにぶっ倒れたシルバのネックレス・・・十字の聖石を凝視し、マグ婆は嘆息した。

第９話　卒業試験

Ｘ７７０年
バーバラの『デビルマ全書』盗難事件から約１年。
７歳になった俺は今、一つの試練を受けていた。
「分かってるな、シルバ？」
いつもの修行場、森の奥深く。
そこで俺は、ずんぐりむっくりとしたチビ竜――――――ボム・センテンスと対峙していた。
「今日で総仕上げだってんだろ？」
「そうだ。今日の摸擬戦で、お前もエレナもプロ魔導士に成る資格があるかどうかが決まる」
「決まらなかったら？」
「また一年は修行してもらう事になるな」
「汗水塗れの一年がまた始まる訳か」
流石にそろそろ卒業したいものだ。

毎日毎日修行修行、別に修行が嫌いなわけじゃねぇけど、いつも森の中というのは退屈だ。

娯楽と言えば釣りに組手、後は偶にマグ婆さんが行商人から買ってくる本くらい。

俺も街に行ってみたりしたいが、修行を終えてある程度モノになるまではダメとの事。

今日こそは合格の判定を勝ち取ってやるのだ。

因みにどうでもいい事なのだが、俺の試験相手がボムである以上、エレナの相手は必然的にマグ婆さんとなる。

同情なんてしない、だってエレナだし。

「んじゃ、いくぜっ!!」

「来いッ!!」

そして、オレとボムの戦いが始まった。

◆◆◆

【滅竜魔法】。

それが俺の魔法だ。

【滅竜魔法】とは、竜迎撃用の太古の魔法(エンシェント・スペル)。

簡単に言ってしまえば自分の身体を竜のモノへと変えて、竜の力を振るう魔法。

俺がボムから教わった【滅竜魔法】は、かつて存在した竜人族（ドラゴンレイス）の武術を魔法で再現したもの。

聞けば【滅竜魔法】の様なスレイヤー系の魔法は属性を吸収する力が付随するそうだ。

例えば【火の滅竜魔法】なら火を、【雷の滅竜魔法】なら雷を吸収する。

だが、俺の【滅竜魔法】にはそういった吸収は出来ないそうだ。

その代わりなのかは知らないが、火や雷と言った大体の属性に対して高い抵抗力を持つのだとか。

故に、ボムの吐く炎の吐息（ブレス）でも真正面から突っ切ることが出来る。

魔法の効果で身体能力が高く上昇しており、高い耐性を頼りに近接戦を主体に戦うのが俺のスタイル。

ボムの放つ魔法の風、氷、炎、雷を強引に突っ切り、その面に拳を叩きこむ。

「【天竜虎博（てんりゅうこはく）】ッ!!!!!!」

◆◆◆

「――――・・・・・・まぁ、とりあえず認めてやろうじゃないか」

ボロボロになった状態で地面に転がる俺とエレナに、マグ婆が判決を下した。

あれから半日続いた試験もどうにか乗り切ることが出来、俺達は認めてもらうことが出来たようだ。

「じゃ、じゃあ、あたし達・・・・・・・」
「一人前のプロ魔導士に・・・・・・・？」
「うむ」
頷くマグ婆。
顔を見合わせる俺とエレナ。
一人前と認められたという事は、これからは本格的に魔導士として活動出来るという事。
もうこんな森の奥底で生活する必要はない。
俺とエレナは喜びの勝鬨を上げようと――――――
「次で卒業試験としようじゃないか」
「これで終わりじゃないの（かよ）!?」
――――――出来なかった。
俺とエレナの悲痛の叫びが森に木霊する。
「ちょっと待ってよ！　さっきのが卒業試験じゃなかったの!?」
「おいボム‼」
「いや、総仕上げって言っただけで別に卒業試験とは言ってねぇよ」
「詐欺だッ‼」

ギャーギャー叫ぶ俺とエレナ。
マグ婆はそんな俺達を一睨みし、持っている杖をコツンと地に突いた。
「文句あっかい？」
「文句しかねぇよッ!!!!」
「まぁ、そう言うな。次が本当に卒業試験だ」
煙草を吹かすボムに歯噛みする。
マジに次で最後だと思いたいところだ。
マグ婆は「コホン」と咳払いして空気を整え、試験内容を話し始めた。
「卒業試験は２人別々に行ってもらう。まずエレナ」
「む」
「お前への卒業試験は・・・・・・『タルナ全書』の探索じゃ」
「『タルナ全書』？」
「読破するだけで風の究極魔法【花翠風月】を修得出来る魔術書じゃ。【花翠風月】というのは古代禁呪と呼ばれておる魔法の一つで、竜巻を自在に操れるなんじゃ」
「ふーん・・・・・その『タルナ全書』を見つけたら読んでもいいの？」
「ああ、構わぬ」
「で、どこにあるの？」

「それを見つけ出すのがお前への卒業試験じゃ」
「ドケチッ！」
「・・・・・・・お前、試験の意味分かってんのか？」
マグ婆に憤慨するエレナに、ボムは呆れるようにツッコんだ。
無駄だぜボム、コイツにまともな知能なんて求めるのは。
「そしてシルバ」
「おう」
「お前への卒業試験は・・・・・・・『T・C・M（テン・コマンド・メンツ）』の探索じゃ」
「テン・・・・・・なんて？」
「『T・C・M（テン・コマンド・メンツ）』・・・・・・かつて、聖石の使い手である勇者が使っていた魔法の剣じゃ」
「勇者の剣ねぇ」
何となく胡散臭い感じだが。
「まぁ、いいや。それを見つけたら俺も使っていいのか？」
「構わぬ」
魔導士目指しといて、手に入れようとするのが勇者の剣か。
何か色々とオカシイ気がしないでもないが、まぁこれも一人前になる為だ。
「勇者の剣か・・・・・・ま、頑張って見つけてみっかね」

第１０話　伝説の剣の行方

むかーしむかーし・・・・・言うほど昔じゃないかもしれんが、シルバという超絶イケメンスーパーハイパーなパーフェクト男子がいました。

そう、彼はある物を探していた。

それはかつて、伝説の聖石使いの勇者が使っていた伝説の剣。

その名は――――Ｔ（テン・）Ｃ（コマンド・）Ｍ（メンツ）。

剣を求めて三千里（三千里って何キロやろ・・・・・・）、初めて出た森の外の世界にウッキウキでくりだし、村や町を散策し、鬱陶しい姉弟子や師匠がいない完全な自由人を満喫していたが、当然修行と卒業試験は忘れていない。

色んな場所へ赴き情報収集に励んでいたが、やはり伝説の剣というべきか、中々それらしい情報は見つからない。

しかし『伝説』なのだから、何かしら逸話はあるはずだ。

それから大きな街についた時に蔵書が豊富な図書館に向かったりして、ようやくそれらしい情報を得た。

大昔にあったという、光と闇の戦争。

その戦争で使われたという聖石と、伝説の剣。
そして、それらを使った勇者の話を――――――。
◆◆◆
「・・・・・・ここか」
早朝に森林伐採して自作したイカダに乗ってどんぶらこと海を行き、途中で大破して結局泳ぐ羽目になっちまったが、なんとか昼過ぎに目的の島へと流れ着く。
海岸へ上がり辺りを見回すが、人の気配はない。
ボロボロになった看板らしきものが砂浜に倒れていた。
「・・・ＧＡ・・Ｒ・・・ＧＥ・・・・・・ＣＯ・・・ＳＴ」
たぶん『ＧＡＲＡＧＥ　ＣＯＡＳＴ』。
ガラージュ島の海岸って意味だろう。
「やっぱ此処が『ガラージュ島』で合ってんのか・・・・・・」
聖石と伝説の剣を使った勇者。
そいつの故郷がこの島なんだとか。
とはいえ、とっくの昔に過疎化し今は誰も住んでおらず無人島になっており、この島がガラージュ島という名前だと知っている人も殆んどいないのだとか。
そんなことを島から近い港町のオッサンから聞いた。

「ま、この島に『ＴＣＭ』があるとは限らねぇけど」
それでも他に手掛かりとかねぇし、探すだけ探すとしようかね。
海岸から伸びる道を進んでいき、錆びついた看板が見えた。
『ＴＯＷＮ』と書いてるから、きっとこの先に町があったんだろう。
進んで行くと、蔦や草木に覆われた建物や、朽ち果てた家などが見える。
『ＣＡＦＥ　ＴＳＵＢＯＭＩ』・・・ふーん、こんな島にも茶店とかあったんだな」
町を歩き回るが、やはり人の気配はない。
完全に無人島だ。
見た感じ住宅地らしきものあったが、どれが件の勇者が住んでいた家なのかは流石に分からない。
「・・・・・・・虱潰しか」
まぁ、幸い大きな島じゃない。
走り回れば島中を探索するのはそう時間はかからない。
何か手掛かりがあればいいんだが・・・・・・
◆◆◆
「――――――・・・・・・これ、か？」

島中を走り回り勇者の手がかりを探す最中、腹が減って海岸に出て魚を素手で取り焼いて食った後の事。
海岸から見える崖から奇妙な気配を感じ取り、そこへ向かってみるとある物があった。
・・・・・・墓と、その横に地面に突き刺す形で、一本の大剣と杖があった。
剣を視てみれば、俺が首にかけるネックレスと同じ形をした窪みがあった。
何か手掛かりでもあればいいと思ったが、手掛かりなんてものじゃない。
剣そのものがあった。
【タルナ全書】の一件の後マグ婆から聞かされた、俺のネックレス。
これがかつて勇者が使っていた聖石で、何故か俺が持っていたのだとか。
ネックレスの鎖部分を外し、聖石を剣の窪みに押し込んでみる。
・・・・・・ピッタリと一致した。
瞬間、少し煤けて見えた剣がボシュっと音をたて、刀身が鉄色に変化した。
「マジか、これで卒業試験クリアか!?」
マグ婆の下から旅立ってまだ一ヶ月も経過していない。
思ったよりも早く試験が終わってしまった。
別に長く続いてほしい訳でもないけど。

「んー・・・・・・・つか、この剣がホントに伝説の剣なのか?」
石を嵌め込んだら変化したのだから、たぶんこの剣が目的のＴＣＭで合っているのだろう。
実際、石を嵌め込んでから剣の存在感というか、不思議な気配が発せられた。
・・・・・・そう、石をはめ込んでからだ。
それまでこの剣からは何の気配もなかった。
「気配あったのコッチなんだよな・・・・・・」
横にある杖を視る。
どことなく鳥と翼を思わせるデザインの杖で、杖の先端の装飾部分の宝石らしきものに、俺の石と同じデザインが施されている。
聖石と同じ装飾で、奇妙な気配を発して、伝説の剣と同じ場所にある。
・・・・・・どう考えてもただの杖じゃないよな。
「この墓に入ってる人のもんか?」
墓石に刻まれている名を視る。
『ＳＡＫＵＲＡ・ＧＬＯＲＹ　００２３～００５６
ＧＡＬＥ・ＧＬＯＲＹ　００２１～００６１
ＳＨＵＤＡ・・・・・・・００・・・～００・・・

ＣＡＴＴＬＥＹＡ・ＧＬＯＲＹ　００４６～０・・・
ＨＡＲＵ・ＧＬＯＲＹ　００５０～・・・・・・・
ＥＬＩＥ・ＧＬＯ・・・・・・～０・・・・・・』
ところどころ墓石が風化してるせいか欠けてて読めないが、この中の誰かがこの剣と杖の使い手なのだろう。
「・・・・・・ま、いいか」
誰かは問題じゃない。
剣のついでに杖も貰っていくか。
この無人島に置きっぱなしなら、所有者なんていないだろうし。
「・・・・・・・あん？」
ふと、海岸を・・・いや、その先の海を見る。
人の気配がした。
見れば、一隻の船がこの島へと向かっていた。